

これは旅行記の2冊目になります。1冊目はこちらからどうぞ。



真夜中の羽田空港は控えめな光にぼおっと照らし出されている。

タクシーの窓から新しい国際線ターミナルを見て、わたしはどこか拍子抜けしている 。

静かだった。あまりに静か。

24時間眠らないターミナルとなった羽田は、しかし、羽をたたんで静かな眠りについているようにしか見えなかった。

道をゆく、我々の乗ったタクシー以外に乗り物は見当たらない。京急もモノレールも 終電が終わって始発はまだという時間帯だった。

本当に今日、NY便が就航するのだろうか。

空港についても、だーれもいないのではないのか。

そしてわたしは、千代田区のニューオータニからタクシーに乗り込み、やはり空港へ向かっているある男のことを思い出している。その場合、雨が降っているはずだ。 空港についたら熱いコーヒーを飲もうと考えている。機内で須賀敦子を読もうと、かばんに文庫を入れてきたその男性もそろそろ空港に到着するはずだった。 一方、いつもと変わらず、ターミナル内の店で勤務についている女性のことも考えている。

彼女は今日、運命の男性と邂逅するはずだった。

白いシャツに黒いパンツ、それにギャルソンエプロンを巻いている。



そして、わたしに振り当てられた役はなんなんだろう。例えばあの物語の劇中に、わたしが登場する可能性というのはあるのだろうか。

特権にまつわる話をしたが、NYを舞台にした小説に登場できるということがNYに棲む特権だとして、わたしは、せめて旅行することによってちらっとても小説に登場することはできないだろうか。

せめて自分の書いている小説に自分を登場させて、満足を得ることはできないだろうか。

けれども、自分を登場させようとしなくても、わたしはすでに、物語の中にいるということはありうるだろうか。

物語に登場できないならば残念だと思っているようだが、心配すべきは、すでにもう 物語の中にいて、外に出られないことなのではないか。

たとえ自分で書いた物語だとしても、自由自在に行き来できるわけではないのではな

いか。自分の書いている物語だからこそ不自由だということもある。 わたしは内側にいるのか、外側にいるのか。 そして、どちら側にいるのか自分で判断することなど不可能なのではないか。

やがてタクシーはターミナルに到着する。

続く

この旅行記のような雑文集は2冊目で、 1冊目はこちらになります。 → NY旅行記



羽田空港国際ターミナルにはおそらく3時半くらいに到着した。

4時半から各社の搭乗手続きが本格的に始まってそのときに照明が明るくなって気づくのだが、到着したときはターミナル全体の照明が半分ほど落とされていた。

ベンチには昨夜のうちに空港に入ってそのまま夜を明かしたらしき若者が散見されたが、ベンチはぎっしり埋まるというのではなくて、どちらかというと空席だらけだ

以前旅行にいったバンコクから深夜の便で日本に帰るとき、こんな遅い時間なのになんて沢山の人が溢れかえっているんだろうと目を瞠ったことがあった。大きなバックパックを枕にしてぐっすり眠り込む者も含めて、エネルギーを発散し続けて、暑苦しいほどだと感じたことを思い出した。こういうのが24時間眠らない空港なんだと、旅の最後の最後にバンコクの本当のエネルギーを見た気がした。

しかし羽田空港は静けさに満ちていた。

空港で夜を明かす若者たちも、バックパッカーという様相ではなく、小奇麗な洋服を着て、かっちりした新しいトランクを脇に置いている。早朝にはニューヨーク便のほかに、ロンドン便、あとは近距離のアジアへの便などもある。

どこか温暖な場所へいくのか、重たいコートを着てきたわたしたちに比べると軽装の 大学生グループが多く、いずれも落ち着いたトーンの声で会話をしている。卒業旅 行シーズンなので学生が目立つのだろう。 それにしても静かだ・・・。



しかし搭乗手続きの始まる時刻になると、突如人が増えだした。

航空会社のカウンターの前にも行列ができている。

我々一家も現金をいくらか両替したあとで列に加わる。

ツイッタートラベラーの役目として5時半頃から開始される、就航便の記念セレモニーをツイートするというものがある。果たしてわたしは、旅行前のウキウキの気分を表現するようなツイートができるのだろうか。

この、静けさに満ちた空港、人が増えたにも関わらず、冷静でクールなこの空港で、 わたしは、はしゃいだような気持ちには到底なれない。

必ずしもはしゃいだようなツイートをする必要はないのかもしれないが、

それでもわたしは旅の始まりを明るく演出したかった。

それなのに、空港はどこまでも静謐に押し黙ったままだ。

わたしはこの時間もこのターミナルのどこかで営業していて、コーヒーを売り続けている、カウンターだけのひっそりとしたお店を探し続けている。

わたしはその店に立ち寄るという役ではない。

その店に立ち寄る役を持っているのは、そう、あの男性だった。

男性はあの店でコーヒーを注文しただろうか。

男性はコーヒーを飲み終えたら、搭乗口へ向かう。

店員の女性もまた勤務時間を終えて搭乗口へ向かう。

わたしもこれから向かう。

それぞれ、JFK空港行きの直行便が、今日就航して飛び立つゲートに向かう。

役者は揃った、という場面だろうか。

とにもかくにもわたしは自分の役割がまたイマイチ判らないまま、搭乗口に向かうしかなかったのだった。



ある街についてのイメージというものは、非常に個人的なもので、

だからそれを話題にするのはひどく厄介なことでもある。

自分の読書歴や、見た映画、興味のある人物、芸術、学問、食べ物やファッションの 嗜好などをつまびらかに相手に知らしめていくような、自分をさらけ出す覚悟が必 要で、それはとても怖いことでもある。

誰だって自分が底の浅い人間だと知られてしまうのは怖いし、

わたしも同じく見栄やプライドが、いつも自分の発言を少しずつ曖昧模糊としたもの にしている。

これだけ、好きなのよ、って言ってるNYについて、

実はわたしはなんにも知らないことを、ここで白状しておくべきだと薄々、思って いた。



もちろん、なにかについて詳しいかどうかという基準は人それぞれだと思うし、さら に詳しいということだけがそれを愛している条件に用いられるわけでもない。

それにしたってわたしはNYに関して無知だ。無知だと認めると楽になるから打ち明けたことも認めるのだが、少々決まりがわるい。

それだけじゃなくて、

だったらあなたはNYのことがそれほど好きではないのでは?それでよく好きだなんて 言えたねって思われるのもつらい。

NYのどこが好きだと明確に答えられないのも、つらい。

そもそも、「嫌いではないが」

「好きなのかどうか」、

言葉の選び方に迷いが出てくる。

そう、端的に言えば、

物語の舞台にふさわしいから、わたしはNYが好きなのである。

しかも、自分でいつか書いてみたい物語の舞台として。

古今東西たくさんの表現者たちがNYを舞台とした物語を作ってきたが、

わたしもまた、NYを舞台にした小説が書いてみたいのだ。

土地の力を借りない、名もない土地を舞台にした優れた小説もある。

わたしもそのような名もない土地を舞台にした小説も書いてみたい。

でも、やっぱりNYを舞台にした小説も書いてみたいのだ。

いつか完璧に洗練されて、とびっきり面白い、NYが舞台の小説を。

ほんとに書けるのかわからない。

でも、いつか書きたいと思う。

だからいつだってその準備をしている。

だから

NYに関するどんな些細な情報も気になる。

過去に書かれたあらゆる物語も読んでみたいし見てみたい。



そういうわけでわたしはNYに、とても、関心があったのだろうと思われる。 そして、その完璧な物語を書くためには、

わたしはNYについて、無知すぎるのだった。

いくら想像を羽ばたかせようにも、

最初の小さな小さなとっかかりも掴んでいないような怖い気持ちになるのだ。

この本が無性に好きだ。



岡本太郎「須賀敦子のトリエステと記憶の町」

この本について昔書き散らかしてあったものを、以下に貼りつけてみた。

何度でも読み返している。

師である須賀敦子を偲んでの旅、その旅行記を教え子が書くというコンセプトで、シリーズものになっていて、他の書き手と他のイタリアの都市を舞台にしたものもあるが、このトリエステの一冊が私はいっとう好きなのだ。

「多国籍の言葉が飛び交うターミナル内の明るさは、外の、大小さまざまの刺激や危険に晒された日常の光とは異質で、どこかよそよそしく、ことごとく現実感を剥ぎ取っている。誰が何をしていてもあまり本当とは思えず、すっきりとデザインされたショップに並べられた品々はいかにも、必要以上につくりもので、空間は架空のスペースで、流れている時間すらみせかけのような気がする。そこは現代人が大好きなディズニーランドというよりも宇宙ステーションを髣髴とさせるヴァーチャルなムードが支配していて、ヤッピーな80年代の精神的遺物とも思えるし、ヨーロッパ統合の見果てぬ夢をイメージした国際仕様のターミナルともいえるし、単なるトランジットの場といってしまえばそれまでだ。それは国際空港という、現実から切り離されたフィクショナルな借り物の世界であり、まだ、決定的に1つの国に属さない、ノー・マンズ・ランドなのだ」

出だし、ミラノ・マルペンサ空港に降り立った著者の筆はこんなにも饒舌だ。

イタリアという書くべきことが満載の国を訪れて、その旅行記の冒頭にここまで空港のことを書いてしまうのは、この薄い本にしてはいささか不自然な気もするが、私はとても納得する。国

際空港の空気をこんなふうに岡本氏はいつか文章にして世に送り出したかったのだと思う。私も常々空港で感じていたけれど、言葉にできなかった「あの感じ」が見事に言葉に置き換えられていて、私はほとんどこの本そのものに、嫉妬とも恋ともつかない、なにか激しい感情が渦巻くのを止められなかった。

トム・ハンクスの「ターミナル」という映画があって、あれはJFKが舞台だが、あの映画に少し不満が残っている。

空港はそんなに和気藹々とした場所じゃない。

上に抜き書きしたような、非日常の、ヴァーチャルな世界なのだ。

これから異国へ旅立つ、神妙な気分を、必要以上に煽りもしないし、また期待に膨らんだ胸をし ぼませるような真似もしない。

あくまで中立の立場で、旅人たちに、とけこむわけでもなく、排他的なわけでもなく、そこにた だ厳然として「ある」。「ある」だけなのだ。

ことさら存在を主張しないのに、しかし、私はやはり<u>空港</u>という場所にくると痛烈にその存在に 圧倒される。

旅行記の条件に、それが「真実である」ことが必要だというのも、頷けなくもないことだが。

しかし、「真実」には違いないのだけれど、それは筆者によって書き綴られていくうちに、

「物語性」を帯びてゆき、ほとんど、上質のフィクションと呼ぶべき、特異なものが生み出される場合もあって、それらはほぼ間違いなく上作であることが多い。

岡本太郎著「須賀敦子のトリエステと記憶の町」

同じく「須賀敦子のアッシジと丘の町」

この2冊。

岡本氏は、東大の<u>イタリア</u>文学科修士課程で、須賀の教えを受け、その後も、教え子として、友人として親交を温めた仲だ。

だからといって、誰にでもこの思索に富んだ「物語」を書けるわけではない。

緻密な設計図どおりに進む理論は、しかし、やがて読者を夢心地にいざない、

どっとその世界に酔いしれた瞬間を見極め、意図的に逸脱を試みてある部分が随所にみられ、心憎い。

「トリエステ・・・」のほうは、イタリアの都会の部分を、繊細な筆の運びで、スタイリッシュ に綴っており、それはまだ若い岡本氏の、初めての大掛かりな著作に込められた意気込みが垣間 見えて、それもすがすがしいが、 同書で、決定的にその実力を認められた後に出版された、

「アッシジ・・・」バージョンでは、幾分、肩の力が抜けていて、こなれた印象がある。

「アッシジ」ではイタリアの田舎の魅力をあますところなく、豊かな語彙と、素直なやさしい感情をあらわに、(前作ではともすると、ちょっとニヒルな文学青年をうかがわせる記述もあった)

なめらかな読み心地を与えてくれた。

そして、須賀さんのたましいが、菩提樹のむせかえるかおりの、そして薔薇色にそめられた石の 聖堂の、そこかしこに、あふれかえっている。

須賀さんの早すぎた死。

受け継いでいく文学の力強い鼓動を感じる。

ミラノ・マルペンサ空港におりたったときの、

挑戦的な東洋人の青年の精悍な顔つきが、ふと自分のヨーロッパへのあこがれに重なって、

むしょうに旅にでたくなるのだった。

読書メモみたいに書いたもので、ひどい誤りがいくつかあったのでそれは消去したり訂正しておいたが、書いたときの興奮をそのままに、と思ってほとんど当時のまま貼りつけておいた。

わたしは旅+写真+文章という組み合わせが本当に好きだ。

この手の優れた本だけを読んで生きていきたいと思うほど。

その本だけで10日間の連休には他に何も要らないという完璧な旅行記(完璧な写真と文章つき)があれば、1万円したって買うと思う。

そんなわけで自分でも旅にまつわる、写真つきの、文章の連なりをついつい作ってしまうんだと 思う。

わたしのはとてもじゃないけど誰かの連休の10日間を完璧に幸せにできるような内容はありません。でも、誰かの暇つぶし、ちょっとした楽しみとなればよいなあと願い、

そしてあくまで自分の楽しみに作っているのでした。

ということをちょっと話しておきたくなってこの頁を挟みます。

上記で述べた、岡本太郎さんの本はamazonへリンクしてあります。アフィリエイトとかになってるわけじゃないので安心してジャンプしてください~。そしてぜひ買うなり借りるなりして楽しまれてください~。おすすめです。

2011年2月20日、ツイッタートラベラー @makeanovel による就航セレモニーのリアルタイムツイートです。



就航セレモニー間に合いました。国際線はなにかと時間かかりますね一。05:30:39



ロンドンに就航するブリティッシュエアウェイズと、ニューヨークに就航するアメリカン航空が合同のセレモニーです。05:34:07



黒人と日本人シンガー登場!会場はノリノリの手拍子。素晴らしい歌。05:35:47

出発前からゴスペル聴けました。05:36:58



スムージーが配られました。 05:39:29



聞き間違いでなけるばアメリカン航空の社長の挨拶。日本語で最初に挨拶してくれましたよ!05:41:58



ワンワールド合同のセレモニーってことでJALの社長も挨拶。アメリカン航空と4月から共同運航するのだそう。合わせて朝、昼、晩と一日三本羽田空港からニューヨークに行けるようになるそうだ。 05:46:56

駐日英国大使の挨拶。05:50:46

先ほどのは、アメリカン航空、アジアパシフィック社長でした。 05:52:26

英国外務大臣ハウエル卿という方などがテープカット。05:54:01



テープカットの様子です。05:56:28



間もなく搭乗。いってきます!機内モードに変えてから電源しばらくオフにします。06:11:50

このようにして就航セレモニーの様子はツイートされ、 わたしたち一家は飛行機に乗り込んだ。 搭乗口付近で、就航便に乗ったという証明書と、記念品の箸(かわいい飛行機を象った箸置きつき)を貰う。

さて、あの男性もまた同じ飛行機に乗り込んだはずだ。彼はファーストクラスか、ビジネスクラスに乗ったはずなので、我々一家と飛行機の中で顔を合わせることはないはずだ。いや、子どもがいるので優先的にバルクシートをとってもらえた。バルクシートというのはエコノミー席の一番最前列で、ビジネスクラスとの境目にある。

もしかすると、あの男性をちらっとでも目撃することも、あるのかもしれない。

そしてコーヒースタンドの店員である女性はその男性のツイッターアカウントを盗みみた興奮を隠したまま、自宅へ帰ろう

としているはずだ…。

飛行機は明るみはじめたトーキョー・羽田国際空港を離陸する。



羽田に就航するNY便の話を聞いて書き始めた小説というか妄想めいたもの→<u>コチラ</u>を読んでくださっている方はご存知だと思うのだが、主人公の女性が、勤めているコーヒーショップに訪れた客である男性のツイッターアカウントを盗み見る、ということが書かれている。しかもスマートフォンを持つ男性の後ろに回りこんで故意に「覗き込もうとして」。

わたしは最近カイシャ勤めなどをしていないせいで電車に乗る機会がめっきり減ったのだが、出産後ツイッターを開始してまだそれほど経ってない時期に電車に一人で乗った際、なにげなく横を向いた瞬間、隣の男性の持っているスマートフォンのディスプレイが見えてしまった。それはツイッターの画面で、男性は新しいツイートを投稿しようとしている。そして文章の中のよく知っている有名人の名前という固有名詞が目に飛び込んで、しっかりそれが読めた。へえ、案外しっかり読めてしまうものだなとわたしは感心した。

ほんとにちらっと一瞬目に入っただけだ。決して読もうと意識したわけではなかった

そして電車を降りてふっと思いついてツイッターにアクセスして、先ほど目に飛び込んだその固有名詞を検索してみた。

するとまさにその男性のアカウントと思われるものを発見。

東横線なう。自由が丘下車。みたいなツイートの内容は、ことごとく先ほどの男性の 条件に当てはまった。ほかにもいくつかその固有名詞をつぶやいているものはあっ たが、その日のその時間帯にその名前を呟いているのはそのアカウントのみで、しか もそのアカウントの持ち主は、さっきまで同じ東横線に乗っていとツイートしていた 。下車駅もあっている。ほぼ間違いないと思われた。



あ一、こんなふうに、電車の隣に座った人間のツイッターアカウントが簡単に調べられてしまうんだ・・・。結構ショックだった。

その男性に興味を覚えたから検索したわけではないし、そのアカウントをフォローしたりなにか声をかけたということも勿論ない。アカウント名もわすれてしまったのでもう探し出せない。

単なる実験のつもりだったのだ。ちらっと画面を見てしまっただけで相手を探し出す ことは可能かどうかという。

こんなに簡単に探し出せると思っていなかった。

それから故意に誰かの携帯の画面を覗き込んだりすことはやってない。むしろ見てしまわないように公共の乗物などでは気をつけるようになった。それはもし見てしまえばまた検索してしまいそうな自分が怖かったせいでもある。

他人のiPhoneなどが無防備に近くにあるとドキドキしてしまう。なにもこっそり覗こうというのではない。ツイッターをもしやっていたら、メンションが届いたときなどに、休止状態でも自動的に画面が点灯してメッセージが浮かび上がる。メンションの宛先としてツイッターアカウントが読めてしまうではないか。相手がわたしにツイッターアカウントを教えてくれていない場合、無断で知ることにつながる。そんなものを目にしてしまいたくなかった。



ツイッターを始めたばかりの頃、gmailのアドレスを知っている者同士ならば相手のアカウントが探せてしまうことを知らなかった。いきなりリアルの知人にフォローされてそのことに気がついて、そのアカウントはびっくりしたあまりに退会してしまったのだった…。

ツイッターが題材になっているドラマとして話題を呼んだものを見た。

偶然カフェで隣同士に座っていて、コーヒーをかけた・かけられた男女。なんとツイッターのオフ会に行ってみたらそれはあのときのコーヒーをかけた・かけられた相手だったのだ。

でもわたしはあまりこの設定に新鮮味を感じられなかった。

これでは従来の物語と変わらない。

あるアクシデントによって顔見知りになっていた男女が、後日合コンとか、友達の披露宴で偶然再会するのと変わらない。

インターネットだからこそ、という出会いだとは思えない。ネットでも知り合ってリアルでも偶然知り合うというのは一見すごい確率のようだからドラマティックのようだが、ネットの特性が生かされていない。

ネットがなければ絶対に出会うはずのない相手と知り合うところがすでに充分ドラマティックなのだ。

カフェで顔を合わせるとしたら、それはネット時代でなくても十分起こることだ。だ からネットで知り合いになったという奇跡を、カフェで知り合うことがむしろ台無し にしている。カフェで知り合えるならネットで知り合わなくてもよかったじゃないという。



これがもしカフェで顔を合わせたときに、顔を見て、「あれ、アイコンの写真の彼と似ている、まさか本人?」とか、「彼の持っているカメラはいつもツイートで彼が自慢しているすごく珍しいカメラと一緒だからもしかして彼本人なんじゃ?」とか気づいてしまったりするなら話は別なんだけど。

ネットで知った人間に興味を覚えてリアルを知りたいと思うのがネット時代における 恋愛の特徴ではないか。もしくは興味を覚えた相手について知りたくて、ネットでの 活動のアカウントを調べてしまうような。

インターネット時代においては、相手の見えない場所・知らないところで相手に近づいたりしようと画策することができる。それをさも偶然のように装うことはできる。そういうのが面白いと感じてしまう。あくまでわたしの面白みを感じるツボであって、そのドラマを面白く見た人にケチをつけるつもりはないし、ドラマ自体にケチをつけたつもりはない。

そしてそんなのは単なるストーカー行為だと興覚めする人もいるのかもしれないし、 もしかするとそれは犯罪行為であるのかもしれない。

でも、なにもそれを現実にやりたいとか、やれといっているわけじゃない。

物語世界にツイッターを登場させるんだったら、わたしならそういう使い方をしたいと、そのとき、ーードラマを見たときだったのか、それとも検索であっさりと電車の隣の男性をつきとめてしまったときなのかーー思った。

とかいう四方山話でした。





水平飛行に入るまで、わたしはシートに縛り付けられながら、目の前に続くビジネスクラスの通路と、その両側の座席を見るともなしに眺めていた。飛行が落ち着いてからはビジネスクラスとの間にカーテンが引かれてしまったが、してからしばらくそこは開け放たれていた。

前のページでも書いたが、子どもを連れているわたしたち一家は、優先的にエコノミー席の最前列の足元の広い席、バルクヘッドシートをとってもらえていたのだ。10キロに達していない乳児がいれば、ベビーベッドを目の前の壁に吊り下げてもらえてそこで赤ん坊を寝かせていくこともできる席だ。通常、ビジネスクラスのすぐ後ろがそのバルクシートになっている。



わたしは自分でお金を払ってビジネスクラスに乗ったことはないが、一度エコノミークラスに乗る予定だったのに、ダブルブッキングのお陰でビジネスクラスに回してもらえたことがあった。足を伸ばして水平に近い状態で眠っている間に目的地、という快適なフライトだった。あとは食事ももちろんエコノミークラスに比べると格段に豪華。

ほかにも、エコノミークラスだと水平飛行にはいってからドリンクは配られるが、ビジネスは搭乗してすぐにシャンパンを手渡されたりする、という違いがあったと記憶している。

わたしの席から一番よく見える席のビジネスクラスに座る30代とおぼしき男性は、着席してすぐに、ビジネスクラス担当の、英国貴族の館の老執事を思わせるようなスチュワードが恭しく運んできたグラスをうけとってそれを飲みながら寛いでいた。ジャケットを脱いでしまって、いかにもリラックスした恰好をしているが、それでもビジネスクラスに座っているという先入観からか、着ているものや持ち物は上質のものであるという気がしてしまう。

しかし、それが「例の男」なのかといえば、違うようだった。

年の頃としては当て嵌まる。

でも、物語のあの男性が発しているはずの「なにか」が、一目見たらわたしにもきっと伝わるような気がしていた。とりあえず目の前の男性からはなにも感じない。きっと違う。

しかし必ずこの飛行機に乗っている。それは確かなはずだった。

フライトは12時間もある。だからきっと、まだ男性を目撃するチャンスはあるはずだ

オットかわたしどちらかが、飛行機に乗っておおはしゃぎの娘の相手をしているスキにもう一方は映画を見たり本を読んだり、ということを交互に繰り返しながら、滞在する予定の時間から見れば、とてもとても長いフライトの時間を過ごした。

オットに、一緒にNYにいってくれないか、カイシャを二日ほど休んでもらえないかという話をしたら、えー?今スゴク忙しいのにー!とブツブツ文句を言うポーズをとったが、元来わたし以上に旅行好きで、長い休みがあれば必ず旅をして生きてきた人間だ。海外旅行にいくというのが嬉しくないはずはなかった。

それでも休みをとるというはっきりとした返事もないのでどうなったのかなー・・・ と思っていたら、しっかり休みもとっていたし、案外楽しみにこの日を待ったのでは ないかと勝手に思うことにしている。

